

# 日本跆拳道家と七大精神及び日本テコンドー協会の存立意義

－何故、出雲大社拝殿注連縄を第21回全日本FT大会ポスターに掲載したのか－

2010年11月11日

日本テコンドー協会

会長 河 明生

日本テコンドー協会(以下、JTA)と改名しはや10年。

日本発祥の新武道・日本跆拳道を整理体系化しつつある中(蹴武型14型の中9型完成)、

世界に普及されている柔道、剣道、空手等が発祥した武道王国日本で

「我が日本跆拳道が存在する意義は何なのか？」

と自問自答する過程で

「哲学無き武道は虚しい」

と考えるに至りました。

国家・組織の哲学は、国家なら憲法、企業なら経営理念、

武道団体ならば流派精神・道場訓に表徴されます。

本大会ポスターに掲載した「日本跆拳道七大精神(表紙参照)」も然り。

その上段には出雲大社のご厚意により注連縄を掲げました。

「注連縄から先は神々がおられる神聖な場所である」

という含意に倣い

「日本跆拳道家にとって七大精神こそが神聖なものである」

と門人達に伝えるためです。

出雲大社が祭る大国主大神の国譲り神話(注参照)における和譲の精神は、

徒手空拳で闘えるという「客観的武力」をもつという意味で

武威を誇る現代の武道家のあり方に教訓を与えるものです。

武力をもって闘うことはできるが、

築き上げた豊かな国と民の安寧を憂い、

話し合いによって平和裏に国を譲ることで豊かな国と民を守るという和譲の精神は、

主義主張を譲らず紛争・戦争の絶えない国際社会に範を示す精神だと思えます。

個人としての武道家にとって国は所属する組織、民は家族に相当します。

正当防衛を逸脱した傷害行為は家族に累が及ぶことをけっして忘れてはなりません。

やはり現代における武道の意義は、

日々の地道な稽古を通じて鍛錬し、

いついかなる時にも平常心を保ち己を見失わないと言う内面強化 = 強い精神力の涵養です。

昔、武道は武術と称しており、戦闘の術だけを重視してきました。

古今東西、武器の所有は武士やナイト等のエリートの証でした。

しかし、武士やナイトは、むやみやたらと刀や剣等を振り回したわけではありません。

民の上に立つ者としてふさわしい倫理観と道徳性が重視されたのです。

その本質は有事の際には命を省みず勇敢に闘う等の自己犠牲の精神です。

その精神があればこそ民の上に君臨する資格が与えられたのです。

では、日本が世界に誇る精神、そして世界が認めている精神とは何でしょうか？

日本のエリート = 武士の礼儀礼節等の美意識や

八百万神を認める和の宗教心等を昇華した武士道精神です。

そしてその精神を基底として世界に普及されたのが日本の武道です。

格闘する技術だけではボクシングやレスリングがあり、ピストルや大砲等、刀や弓よりも殺傷能力の高い武器を開発改良してきた欧米人は受け入れなかったはずですが。

ところが最近の日本では、武士道精神は廃れ、

「上」も「下」も功利主義を基底とする自己中心観が蔓延し、

倫理的道徳的格差が拡大しています。

他方、武士道精神を守らなければならない武道界も文武両道の「武」のみが突出し「文」が疎かになっています。

また武道界も包含するであろう広義の格闘技界の不祥事も深刻です。

例えば大きな武道団体の長でありながら汚れた金目当てで暴力団や仕手集団等の反社会集団と交流している「武道屋」、

横綱・朝青龍やボクシング・チャンピオンの亀田親子の不祥事、

暴力団との関係が明らかになった大相撲や老舗プロキックボクシング団体の不祥事等です。

世間は「殴り合いを好む粗暴で野蛮な連中」と蔑んでいないのでしょうか？

人間は反省し更生できる生物です。

10代の頃の私は「アウトロー」でした。

しかし、武道を通じて更生し、

日本跆拳道と七大精神を創始し、世の中に問うている立場上、

常に我が身を恥じることを忘れたことはありません。

しかし、最近の格闘技界は、その姿勢に欠け、自浄能力も疑わしい。

このような状況を看過することはできません。

J T A は「正しい人間を育てる正義の武道団体」として世の中に一石を投げなければならない。

J T A が普及する日本跆拳道は、格闘する術を修得することは事実ですが、けっして人を傷つける

ためのものではない。

日本跆拳道家たる者は、強くなればなるほど、実った稲穂は頭をたれるの例え通り、謙虚で礼儀正しい人格者とならねばならないのです。

武士道精神を守り文武両道の社会性の高い武道家輩出を実践する武道団体に成長することが我がJTAの目指すべき組織的課題であり存立意義なのです。

それを可能にするのは「正義の精神」＝「日本跆拳道七大精神」の涵養以外にありません。

第21回全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会ポスターに掲載した注連縄は白帯にも通じます。日本跆拳道の門人は初心を忘れてはなりません。

とくに、黒帯となり指導者となった門人達は、足ることを知らねばなりません。

不況下かつ人心が乱れつつある日本（例えば親の死体を放置して年金を詐欺する等）での私生活においてたとえ若い頃の自分が思い描いていた人生と現実の人生とが乖離していたとしても、私生活で満たされない鬱憤や欲望を所属するJTAのクラブ内に持ち込んでではありません。

個人的な世俗的欲望は克己の精神により封印しなければならないのです。

そうすることでJTAのクラブは「素心の道場」となり、

職場では観じることのできない純粋な人間関係を構築できるオアシスとなるのです。

以上

注 『古事記』の神代記の多くは出雲神話であり、

今でも八百万の神々は神在月に出雲大社へ集まると伝承されている。

出雲の神々の始祖は天皇の祖先とされるアマテラス（天照）の弟であり『日本書紀』にも登場するスサノオである。

スサノオの子孫がオオクニヌシ（大国主）であり、

霊力と善政により出雲地方を豊かな国（豊葦原瑞穂国）にした。

天照は天孫が治めるべき地上の国を欲し、大国主に対し

「豊葦原瑞穂国を我が子孫に譲れ」

と三度使者を送った。

三番目の使者・武神タケミカツチ（軍神、武術武道神。鹿島神宮祭神）に対し、大国主は

「息子コトシロヌシ（事代主。海神、商業神。釣り好きだったと言われ鯛をもつ恵比寿を連想させた）の意見も聞いて欲しい」と提案。

タケミカツチは事代主の意見を聞いたところ彼はあっさり承諾したという。

事代主は託宣神とも呼ばれ、賢明な判断をする神であったため

その賛同により「国譲り」の正統性・正当性が担保された。

しかし、弟タケミナカタは反対し、タケミカツチと対決したが敗れて「国譲り」を承諾。

信濃に逃れて諏訪湖に隠棲した（諏訪大社祭神となる）。

大国主は天の御子同様の大きな宮殿を建てることを条件に「国譲り」を承諾。

そうすれば自分に従う多くの神々達は事代主の判断に従い背かないとした。

天照は受諾して天日隅宮（現出雲大社）を創建し、第二子・天穂日（天孫）を大国主に仕えさせた。

その子孫は代々「出雲國造」と名乗り出雲大社宮司を世襲し、

大神（大黒様）以来の神統と道統を受け継ぎ  
日本のために祈りを捧げている（現在第 84 代目）。  
近年、巨大な柱の遺跡が出雲大社敷地内から発見され、  
古に日本最大の宮殿が存在したことが考古学的に実証された。